



TITLE:

4.5 花山天文台御一行・明治村遠足の頃 (4. 花山天文台の思い出)

AUTHOR(S):

鳴海, 泰典

CITATION:

鳴海, 泰典. 4.5 花山天文台御一行・明治村遠足の頃 (4. 花山天文台の思い出). 花山天文台70年のあゆみ 1999: 58-61

ISSUE DATE:

1999-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/241451>

RIGHT:

4.5 花山天文台御一行・明治村遠足の頃

鳴海 泰典（九州東海大学）

手元に1枚の写真がある。空は曇り模様で、皆さんセーターの重ね着などして、少し寒そうである。背景は穏やかな海で、遠くに岬が突き出している。集団から少し離れて、宮本先生が所在なげに立ち、斎藤さんがとてもほっそり見える。はじめ何時の頃の写真かはっきりしなかったが、為永さんが手にしているパンフレットに「若狭湾」という文字が辛うじて読めたので、三方五湖に1泊旅行した昭和41年4月の天文台遠足の写真であると思い当たった。



昭和40年から昭和43年にかけて、毎年春に天文台のほぼ全員が参加して、遠足に出かけた時期があった。昭和41年4月のこの写真の後列は、左から中井さん、田中さん、赤羽さん、斎藤さん、椿さん、そして服部先生奥様（服部先生が見えないのは、おそらく先生がシャッターを押したのだろう）、松井さん、黒河君、船越君、母袋さん、宮本先生。前列は、左から神野さん、為永さん、久保田さん、私（鳴海）、岩崎君の17人である。川口先生がこの写真に写っておられないが、当時フランスに留学中ではなかったろうか。この旅行には参加していないが、天文台の炊事の稲田のおじさん、龍谷大学に移られた矢田さん、上宝村本郷の地球物理観測施設に勤務された富永さんなどが、昭和41年当時の私の記憶の中にある天文台の方々である。

私が花山天文台に上がったのは昭和39年4月であった。当時天文台では、新天文台建設計画が具体化し、信州の編笠山、飛騨の十三墓峠、大雨見山で予備観測が始まり、新天文台建設に向けての熱気が溢れていた。（飛騨天文台建設の経緯は服部先生の「飛天文台」：天文月報第62巻第1号(1969)に詳しい）。また、おりから米国の月探査がアポロ計画の実現に向けて精力的に進められた時期であり、花山天文台でも新鋭の津上製作所製60cm反射望遠鏡を用いて、月が出ている限りは月面写真を取り、フィルムの一部は天文台資料として保存し、残りは米国へ送るという共同観測が行われ、新米の私もアルバイトを兼ねて、月観測グループの一員に加えてもらうことになった。月観測グループの責任者が矢田さんで、4月のはじめ観測方法を教

えてもらうため天文台に上がったとき、薄暗い観測室から出てきた矢田さんが、目の醒めるように鮮やかな真紅のセーターを着ていたので驚いた。その日の矢田さんの教えは、この仕事は、(1) 世界の宇宙科学発展の一環である、(2) 花山天文台の名誉を代表しているということであった。ともかく、全員が張り切っており、私の天文台の第一印象は、春の陽に輝く矢田さんの真紅のセーターから始まっている。

昭和39年度は月観測をはじめ信州や飛騨の予備観測で明け暮れたが、翌昭和40年春に黒河、船越、岩崎の3氏が揃って天文台に来てから、天文台はますます活気づいた。このように生き生きした雰囲気の中で、昭和40年から昭和43年まで、新入生歓迎を名目に天文台のほぼ全員が揃って遠足に出かけるのが慣例になった。一つには、昭和39年には服部先生も川口先生もスクーターを飛ばして花山を上り降りしていたのが、昭和40年から41年にかけて、次々と自動車になったという、日本の車社会の幕開けが関係していたのかも知れない。古いノートを参考に、この時期の花山天文台遠足を少し振り返ってみたい。

1) 昭和40年(1965)：明治村遠足

これ以前に、富永さんの発案で、京都から京都までの乗車券で、一度も汽車から降りずに紀伊半島を一周した列車遠足があったとのことであるが、私は知らない。40年4月に黒河君、船越君、岩崎君の3人が揃って天文台に進学するとのことで、新入生歓迎旅行として、おそらく富永さんが中心になって企画したのが、日本ライン、犬山城跡を見て、できたばかりの明治村で遊ぼうということであった。『4月19日(月)：新幹線で名古屋まで。車窓から菜の花、桃の花が美しい。桜はどこでも満開。名古屋で食べた煮込みうどんが美味しい。』とノートにある。名古屋のきしめんを知らなかったらしい。

『バスで明治村へ。まだ雑然として面白いことはなかったが、漱石の家というのが面白かった。バスで名古屋へ。「大甚」で服部先生の友達の鈴木さんに御馳走になる。赤羽さんと二人、準急で京都に帰る。車中眠いことと言ったら。楽しいけれど疲れた。』とある。まだ車社会になっていない頃の天文台の遠足である。

2) 昭和41年(1966)：三方五湖1泊旅行

『4月16日：三方五湖天文台遠足。椿さんのパブリカに同乗。夜は調子に乗って騒ぎ過ぎた。』とある。車社会の遠足の始まりである。昭和40年の夏に、服部先生運転のジープで名神高速道路を走り、これが時速100km/hだと言われて興奮したのを覚えている。夜はおそらく皆でお酒を飲んで、夜更かしもしたのであろう。翌4月17日、『椿さんに乗せてもらって帰京。途上雨が降ったり、止んだりで楽しかったが、ともかく眠かった』とある。

この年7月には、松井さんをリーダーに、野村さん、母袋さん、為永さんをはじめとする大学院生6人で、7月23日から26日までの4日間、日本アルプスの雲の平から三俣蓮華、双六岳を通り、新穂高温泉に下りる登山旅行をしている。当時本郷にいた富永さんが、『山に上ってそのままならともかく、また下りてくるとは愚の骨頂である』と登山の悪口を言っていたのを、懐かしく思い出す。9月には久保田さん、母袋さん、為永、岩崎、鳴海で比良山ハイキングをしたり、元気が余っていたようである。

3) 昭和42年(1967): 和歌山・加太1泊旅行

服部先生の「飛騨天文台」記録(天文月報、第62巻第1号;1969)に、『昭和40年に大雨見に最終候補地にきめてからも、現地に建てた観測小屋に四季を通じて、泊まりこんだ』とある。この頃、花山と飛騨の往復はますます頻繁になり、天文台も確実に車社会になってきたようであった。

この年の6月3日、4日の和歌山・加太遠足では文字通り車を連ねる状態になった。この時は宇宙物理学教室からも参加者があり、人数もかなり多かった気がする。おそらく中井さんの発案で、相互の連絡のために各車にトランシバーを積んだのはこの時ではなかったろうか。ただし、使い方に不慣れであったのと、せっかく連絡を取り合っても、はじめての土地で自分がどこにいるのか分からず、戸惑ったりしたものである。結局、後続車と連絡を取るには、道の脇に車を止めて、やってきたところで話をするのが一番と改めて認識したものである。

ノートに『6月3日: 加太遠足。10時、天文台発。加太についたのは6時近く。夜はお酒。皆とても酔った』とある。天文台から和歌山までどうして8時間もかかったのか、今となっては分からない。翌日は『友ヶ島に遊ぶ。魚釣りなど。午後2時出発。中井さんのお宅に寄って帰る。夜、解散会でビールを飲み、グローキー。』となる。この頃の天文台はお酒を飲む機会も多かった。また、この夏は飛騨天文台の境界測量の立ち会いなどで、天文台のメンバーが入れ替わりで大雨見の観測小屋を訪れた。黒河氏、石浦氏と3人で、捕まえたマムシをフライパンで黒焼きにし、おそろおそろ試食したのもこの頃である。

4) 昭和43年(1968): 赤目48滝1泊旅行

この年には大雨見山の予備観測も終わりに近く、冬の気温や天候を現地で確認するため、2月の始めの1週間ほど、斎藤さん、黒河氏と雪の観測小屋に上がっていき、スキーを楽しんだりしたことを思い出す。もっとも皆下手で、尻餅ばかりついていた。雪解けとともに、管理棟、研究棟の建設が始まり、8月に訪れたときには建物がほぼ完成していたのを覚えている。

この年の遠足は赤目48滝。『4月18日: 午後1時、天文台発。岩崎氏の車に同乗してトップを走る。天気良く、絶好のドライブ日和。上野一名張一赤目ロッジ。夜、大宴会』となっている。翌日は『赤目48滝をめぐる。ツツジが綺麗な色を見せている。1時、赤目発。船越氏に同乗。後、田中氏。4時30分天文台に帰る。』とのこと。この時もかなりの人数で山椒魚を眺めたり、赤目溪谷を上ったりしたが、手元に写真がないので、人数等が分からない。この年の冬までには、大雨見山の建物はほぼ完成し、赤羽さんと二人で12月28日から1月6日まで、飛騨天文台最初のお正月を雪の中で過ごしたのを覚えている。

昭和44年春には飛騨天文台が正式に活動を開始し、昭和44年7月20日には米国のアポロ11号が月面に着陸し、7月21日は一日中テレビに釘付けになり、月面の活動が意外と動き易そうなことに驚いたものである。この後も天文台メンバーの活動意欲は旺盛でグループごとの小旅行やハイキングが続いたが、皆さんが忙しくなり、天文台全体としての遠足は昭和43年の赤目遠足で終わったようである。花山、飛騨両天文台の維持、発展だけでも、大変な労力を必要としたと思われる。昭和40年に始まった天文台遠足は、新天文台建設に向けての熱気とともに、米国のアポロ計画に代表される太陽系科学の発展、東京オリンピック(1964)後の日本の高度成長、特に車社会への転換の中で起こった出来事だったのかも知れない。